

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

OBのお客様から

最近、前にリフォームさせていただいた方々からお電話やお手紙を頂く事が多くなった。それは皆様、人生の節目や転機がおとぎずれての事だろう。

ある日の電話は御主人様からで、いつもは奥様からなのにとドキッとした。やはり悪い知らせで、奥様が亡くなられたとのことだった。遺品を整理している中に、奥様と私がやり取りした手紙が出てきて、御主人様がそれを読むうちに、西田さんには連絡しなければと思われたとか。当時六〇歳前後のご夫婦も一〇年経ち二〇年経つうちに、八〇歳の声を聞くようになっていた。何があってもおかしくはないのかもしれないものの、お話を聞ききしながら、胸がつつまった。

そのお宅はリビングの改装から始まり、次にお風呂や洗面所の水周り、サロンの増築に、お祖母様を引き取るための介護リフォーム。子供が集まる軽井沢の別荘の増築も設計させていただきました。私にとってホームドクターと自負するお宅だったのだ。奥様の賢さと機転にこちらが助けられるこ

とも多く、奥様の人柄に私自身が魅了されていた。

家中のほとんどのリフォームが終わった頃、ある建築の受賞作品を出され、「これ義父が設計した建物なの」とおっしゃる。一瞬どういうことなのか意味がわからなかったのだが、御主人の御父様は著名な建築家だったのだ。私がプレッシャーを感じないようにとの配慮で、それまで黙っていてくださったのだ。そんな時に、フツツといったずらっぱく笑われる明るい笑顔が忘れられない。

素敵な奥様のいない、一人暮らしの御主人様の暮らしはどんなだろう。お伺いするとしっかりとした面持ちで、「掃除は時々来てもらうものの、三食ちゃんと食べていますよ。ジムにも行き友達とランチをしたり、庭の手入れをしたり、ピアノを弾いて過ごしています」とのこと。海外での思い出の品や奥様との写真をお子様たちが飾られ、綺麗に片付いている家の中で、「家内は本当にリフォームの好きな人でしたね」と言われた。生活の変化があるたびにさせていただ

た、あるべきものがあるべきところというリフォームが、今も役立っているようであらう。

そしてまた一五年前、関西に通って設計させて頂いた奥様からもお手紙が届いた。「ご無沙汰してしまいました」と始まり、近況をお知らせくださるものだった。「主人ももう八三歳です」とあり、お子様のいらっしゃるらないご夫婦の心もとなさが伝わってきた。

大学の講義でリフォームは家を作り変えるだけではなく、住む方の人生に関わる仕事なのだと言っているのだが、設計した御宅の方々にとって、設計者が家づくりの一部で有ったのだと再認識し、なんと責任の重い、そしてありがたい仕事をさせていただいたことかと思ふ。

リフォームはライフスタイルを時系列で考えて設計していくことが大事なのだが、同時に予測がつかない難しさも感じる。

別の方からの、「もっそろそろカーテンを変えたいのー」との明るいお問い合わせに、ほっとしている自分がいる。



西田恭子のプロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。